

「片町夜曲(セレナーデ)」 # 1 原案シナリオ

山崎浩治

マンガ「片町夜曲(セレナーデ)」 #1 原案シナリオ

#1 夜の片町スクランブルを歩いてくる美咲アヤカ

アヤカのモノログ(以下、M)「あたし、美咲アヤカは大学2年生。趣味と実益を兼ねて週2回、片町のスナックでバイトやっています！」

#2 テナントビルの一角にある「スナック香澄」の看板

#3 同・店内

カウンターの中にいるミニスカートのスーツ姿の香澄ママ(30代)。

アヤカのM「香澄ママは優しいし、いろんなお客さんとお話することで、とっても勉強になっているの」

香澄ママの傍らで、水割りを作ったり、カラオケを歌ったりしているアヤカ。

アヤカのM「川島さんがやってきたのは北陸新幹線が開業してしばらく経ったころ。スナック香澄では珍しい一見のお客さんだった」

扉を開いて、店内に入ってくるビジネスマン風の川島(40代半ば)。

カウンター席に座った川島の前に、おしぼりとお通しを置く香澄ママ。

香澄「うちの店は初めてですね？」

川島「出張で東京から来たんだ……とりあえず、ビール(懐かしそうに店内を見回す)」

L字型カウンターのこぢんまりとした店内。

川島「ママ、この店はいつオープンしたの？」

香澄「3年前ですけど……」

川島「20年以上前、ここにあった花凜という店によく通ってたんだよ。オレがまだペーペーの新入社員のころさ」

#4 「スナック花凜」の看板(回想)

#5 同・店内

川島のM「入社して宣伝広告の部署を志望したんだけど、配属されたのは営業部。しかも最初の赴任地が縁もゆかりもない金沢で、当時のオレは正直クサってた」

カウンター席に座って水割りを呷っている20代の川島。

川島のM「花凜は先輩に教えてもらった店。女盛りの美人ママにはずいぶんグチを聞いてもらったよ」

川島の話に耳を傾けている和服姿の花凜ママ(30代)。匂い立つような色気がある。

川島のM「花凜ママに話すだけで、癒やされたものさ。彼女に出会わなかったらオレ、仕事ケツを割ってたかもな……」

6 「スナック香澄」の店内(現在)

川島、遠い目でビールを飲んでいる。

川島「花凜ママは料理が得意だね。酒でいじめた胃に優しいからって、冬になると三杯汁を食べさせてくれたんだ。あんまり旨くてね、何杯もお替わりしたもんさ」

香澄「(思案する目で)三杯汁……」

アヤカ「(にっこりと)お客さん、花凜ママのこと、好きだったんですね」

川島「(照れ臭そうに)3年経って金沢から転勤が決まった時、初めてママをアフターに誘ったんだよ」

7 真夜中のいしかわ四高記念公園(回想)

歩いてくる川島と花凜ママ。

川島「(ぎこちない笑顔で)オレの嫁さんになってくれよ、花凜ママ」

川島のM「冗談めかしてたけど、本気だった。`あわよくば、が本音だった」

花凜ママ、つま先立ちして川島にキスする。

花凜「(悪戯っぽく微笑んで)川島ちゃんももっと偉くなったら考えてあげる」

8 「スナック香澄」の店内(現在)

川島「その言葉をエネルギーにして仕事頑張ったよ。オレが部長にまでなれたのも花凜ママのお蔭だったかも……(ビールを飲み干す)」

香澄「(ビールを注ぎ足して)東京にはいつ帰られるの？」

川島「明日、商談が終わったら……なんで？」

香澄「花凜ママの消息を知り合いに聞いてみようと思うの。もしよかったら、明日の夜もいらして。明後日、かがやきの始発に乗れば、会社には遅刻しないでしょう」

川島「(目を輝かして)頼むよ、ママ！」

香澄「(アヤカに耳打ちして)アヤカちゃんにはちょっとお願いがあるの……」

9 金沢市内(翌日の昼)

自転車を走らせるアヤカ。

アヤカのM「あたしは朝から`あるもの、を探して金沢じゅうを走り回った……」

10 「スナック香澄」の看板(夜)

11 同・店内

川島「(カウンター席に腰を下ろし)花凜ママの消息は分かったかい」

香澄「いろいろあたってみたけれど、分かったのは15年ほど前、結婚して店をたたんだということだけ。以来、消息不明なんですって」

川島「(落胆して)……消息不明」

香澄「(明るく)でも、水商売の世界で消息不明は幸せな証拠ですよ」

川島「(救われたように)……それならよかった」

川島の前に、香澄が汁椀を差し出す。

香澄「タラの三杯汁を召し上がれ……夏のタラを使ったから、花凜ママの味とは違うでしょうけど。アヤカちゃんが金沢市内を回って季節外れのタラを探してくれたんです」

アヤカ「(笑顔を爆発させて)お客さんのために一生懸命探して来ました！」

川島「落語の`千両みかん、だな、まるで……(タラ汁をすすり)この味だ、旨い」

香澄「ダラの三杯汁は`遠慮のない大食らい、のこと。でもタラの三杯汁は美味しいから何杯お替わりしていいの。タラとダラでは大違い。花凜ママはきっと、お客さんに何度も来店ほしくて三杯汁を作ったんじゃないかしら。冬になったら、また食べに来て」

川島「冬とはいわず、ちょくちょく寄らせてもらうよ。金沢と東京がこんなに近くになったんだから……ボトル入れて、ママ。それと三杯汁お替わり！」

アヤカのM「その夜、川島さんはご機嫌で帰っていかれました」

店の後片付けをしているアヤカと香澄。

アヤカ「川島さんと花凜ママ、合わせてあげたかったですね」

ボトルが並んだ棚に川島の新しいボトルがある。

「金沢最高！ 川島」とサインしてある。

香澄「会わないことで、花凜ママの思い出が川島さんのなかで永遠になったの。いつまでも忘れられない恋って切ないけれど、いいものよ。アヤカちゃんもそんな恋をしてね」

1 2 夜の片町スクランブルを千鳥足で歩く川島

川島が満月を見上げる。

満月のなかに花凜ママの笑顔が見える。

アヤカのM「美咲アヤカ19歳。大人の恋って素敵だな、と思った夜でした」